

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年5月30日現在

機関番号：33917

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16746

研究課題名(和文)ドホイ語の言語文化記述の基盤作成

研究課題名(英文)Construction of a foundation for describing Dohoi language and culture

研究代表者

稲垣 和也 (INAGAKI, Kazuya)

南山大学・外国語学部・准教授

研究者番号：50559648

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、主に人類学者との学際的連携を通じ、ドホイ語の言語文化記述の基盤を作成することを目的として実施された。ドホイ語が話されるインドネシア共和国をはじめ、フィンランド、カナダ、イタリア、オーストラリア、日本の人類学者および言語学者と協働関係を築くとともに、研究会、ワークショップ、電子メール等を通して活発な意見交換することができた。また、インドネシアに計5回渡航し、現地のドホイ語母語話者らとの良好な関係の構築、および言語文化維持のための現地ネットワークの構築を果たした。加えて、学術論文5点、口頭発表総数12件、図書総数3点等の成果に基づき、ドホイ語記述のためのフレームワーク開発を推進した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、海外の研究者と緊密に協働することでドホイ語の言語文化研究を進めたものである。フィールドワークを基にして研究している別分野の学者が協働で研究を進めた類例は少なく、本研究課題は、そのような協働に基づいた言語学的・人類学的研究の貴重な好例と捉えることができる。また、少数派であるドホイの言語文化は、多数派である上位の言語文化に取り込まれ、消滅してしまいかねない状況にある。このような少数派コミュニティの言語文化維持のための基盤づくりを部分的に達成した点にも、本研究課題の学術的・社会的意義を見出すことができる。

研究成果の概要(英文)：This research project has been conducted for the purpose of constructing a future foundation for the description of Dohoi language and culture through interdisciplinary cooperation mainly with anthropologists. During the four year study period, collaborative relationships have been successfully established with anthropologists and linguists of Finland, Canada, Italy, Australia, Japan, and Indonesia where Dohoi is spoken. At the same time, a number of opportunities to interdisciplinarily exchange views on language and culture were obtained through research meetings, workshops, and e-mail communications. In addition, harmonious relationships with native speakers and a close local network for the maintenance of Dohoi language and culture were also established. Moreover, this project has promoted the development of frameworks for describing Dohoi language and culture on the basis of the research accomplishments (5 scholarly articles, 12 academic presentations, and 3 books).

研究分野：記述言語学

キーワード：学際的協働 フレームワーク開発 言語文化記述 言語文化維持 言語記録 人類学 言語学 ドホイ語

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ドホイ語は、オーストロネシア語族の中のバリト諸語に分類される。バリト諸語は、Ngaju 語をはじめ、19 世紀から言語学者や民族学者の関心を集めてきた。20 世紀に入り、東バリトの Maanyan 語とマダガスカル Malagasy 語との間の系統関係が明らかになると、バリト諸語がもつ研究上の重要性が増した。それにもかかわらず、現状ではバリト諸語研究の進展が遅く、言語学者と人類学者を合わせて数名が研究しているに過ぎない。研究成果が乏しい原因として、各言語・民族についてのフィールドワークが充分には実施されておらず、言語記述の精度が比較的低いままになっている点が挙げられる。また、実際の言語使用の現状を見ると、特にドホイ語は、マレー/インドネシア語や Ngaju 語といった優勢な威信言語に圧倒されており、その言語文化が縮小傾向にあることから、緊急に記述を要する言語の一つとなっている。研究開始当初までに、約 10 年かけてドホイ語の言語学的研究をおこなってきた研究代表者と、約 20 年かけてドホイ族の人類学的研究をおこなってきたパスカル・クーデールは、このような現状に鑑み、互いに自らの専門領域を越えて連携し、協働することの必要性を認識していた。

### 2. 研究の目的

緊急に記述を要するドホイ語について、その言語記述の精度の向上を目指し、かつドホイ語の効率的な言語文化記述を通してバリト諸語研究の進展速度を上げる必要がある。そのためには、まずは人類学者との連携をはかり、ドホイ語の言語文化的な中核部にあたる辞書およびテキストデータの編纂を進めるとともに、ドホイ語だけでなく、他のバリト諸語の言語文化記述にも資するようなフレームワークの開発をおこなうことが重要である。これらのタスクを通して、ドホイ語の言語文化記述の基盤を構築することが本研究の目的である。この研究目的を達成するために、本研究では分野を越えた学際的連携体制をとる。フィールドワークを主体として研究を進めている記述言語学者は概して個人単位で研究しているが、そのようにして得られる成果の利用価値は個別的になりがちであり、価値が狭まってしまうという問題がある。本研究は、そのような問題を部分的に克服するため、人類学の領域にも利するような研究成果の達成を目指し、将来的には、生物学者や文化情報学者との連携も視野に入れ、より利用価値の高い複合的研究成果を模索するものである。

### 3. 研究の方法

ドホイ語の言語文化記述の基盤を構築するため、ドホイ語現地調査、ドホイ社会への貢献の模索、言語学的研究、人類学的研究の 4 つに作業を分割し、研究代表者が各作業を統括する仕組みをとった。研究代表者にとっては、特に、ドホイ社会との連携と、人類学的研究との連携によって、これまでの個人単位での研究では得られなかった視点の獲得と研究効率の向上が見込まれた。ドホイ語の研究は記述言語学的手法によっておこない、ドホイ文化の研究は言語人類学的手法によっておこなっている。

### 4. 研究成果

2015 年度は、日本およびインドネシアで言語学者との意見交換をおこなうことで言語学研究における連携を強固にするとともに、ドホイ語研究における協働の際に重要となるデータを整理した。すなわち、23.5 時間にわたるドホイ語の録音データをデジタル化し、その利用可能性を高めた。また、次年度以降の研究内容について、パスカル・クーデールと入念に打合せをおこない、学際的連携体制を強化した。加えて、2 点の学術論文を発表し、3 件の口頭研究発表をおこなった。

2016 年度は、日本、インドネシア、オランダで言語学者およびインドネシア研究者と意見交換をおこなうとともに、ドホイ語母語話者との意見交換を進めた。また、ライデン大学を訪問し、オランダ王立言語・地理・民族学研究所が所蔵してきた、20 世紀初頭にドホイ語地域の民族誌を記したカール・エップレの手記や論考など、合計 785 ページ相当の遺稿の撮影およびデジタル化をおこなった。併せて、同じくドホイ語地域についてのフーゴ・ハフナーの遺稿 473 ページ相当、ハンス・シェーラーの遺稿 137 ページ相当の撮影およびデジタル化をおこなった。また、ドホイ語の英雄叙事詩を含む、113.5 時間にわたる録音データのデジタル化をおこない、その利用可能性を高めた。これらによって、本研究が推進するドホイ語母語話者ら、および人類学者との連携基盤がより強固となった。加えて、1 点の学術論文を発表し、1 件の口頭研究発表をおこなった。

2017 年度は、日本およびインドネシアにおいて、言語記録、インドネシア研究、学際的連携に関して各専門家と意見交換をおこなう機会が多く得られた。併せて、インドネシア、中カリマンタンと西カリマンタンで現地調査をおこない、各ドホイ語話者と連携体制の再確認をする機会が得られた。また、ライデン大学で収集した文献資料の整理をはじめとする数々のトピックについてパスカル・クーデールと電子メールを通して議論をおこなった。加えて、1 点の学術論文を発表し、3 件の口頭研究発表をおこなった。

2018 年度は、主に日本において、言語記録、インドネシア研究に関して各専門家と意見交換をおこなう機会が得られた。特に、インドネシア研究者と交流する場が多く得られた。併せて、2017 年度と同様、中カリマンタンと西カリマンタンで現地調査をおこない、各ドホイ語話者と本研究課題の連携体制を再確認することができた。ライデン大学で収集した文献資料について、

パスカル・クーデールとの電子メールでの議論を継続的におこない、今後の研究方針についても協議した。加えて、1点の学術論文を発表し、5件の口頭研究発表をおこなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5件)

稲垣和也. 2018. 「インドネシア語における母音交替重複オノマトペ」『インドネシア 言語と文化』, 査読なし, 24号: 121-138 (18p.) .

稲垣和也. 2017. 「インドネシア語のオノマトペ」『インドネシア 言語と文化』, 査読なし, 23号: 43-63 (21p.) .

稲垣和也. 2016. 「インドネシア語の所有構文」『インドネシア 言語と文化』, 査読なし, 22号: 77-99 (23p.) .

Inagaki, Kazuya. 2015. Discourse and information structure in Kadorih, *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages*, 査読なし, 27-39 (13p.) [<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/84507>]

Inagaki, Kazuya. 2015. Clause combining in Kadorih of Central Kalimantan, *NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia*, 査読あり, 59号: 3-20 (18p.) . [<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/86504>]

〔学会発表〕(計 5件)

Inagaki, Kazuya. 2018. “Word prominence in Pontianak Malay”, The Second International Workshop on Malay Varieties “A Research on Varieties of Malayic Languages”.

稲垣和也. 2018. 「言語的な近接化と差異化について：インドネシア、カリマンタンにおけるドホイ語の音韻から」, 2018年度南山学会文学・語学系列第1回研究例会.

稲垣和也. 2018. 「方言から言語記述を模索する：ドホイ語の音韻を事例として」, 京都大学言語学懇話会第106回例会.

Inagaki, Kazuya. 2017. “Sound symbolism in Indonesian ideophones”, Second Annual Kaken Meeting and Bilateral Collaboration, Kaken Joint Meeting Research on Expressives in Asia.

Inagaki, Kazuya. 2017. “Austronesian languages and Mainland Southeast Asia”, NIG-Joint Research (no. 22A2017) “Study on Origin and Migration of the ‘Austriac’ peoples: Mainly on Mainland and Inland Southeast Asia”.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

研究者詳細(南山大学): 稲垣和也;

<https://portal.nanzan-u.ac.jp/research/view?l=ja&u=103887>

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。